浅田選手ら練習 中京大リンク

夢磨く 情熱整氷

アイスマン「毎日が本番」

来年二月のソチ冬季五輪へ向け、地元選手の活躍に期待が膨らむフィギュアスケート王国・愛知。浅田真央選手（中京大）ら代表候補が練習に励むリンクの一つが愛知県豊田市の中京大学アイスアリーナだ。国の強化拠点施設にも指定されるリンクの命は氷。輝く銀盤の陰で、氷の状態をベストに保つ「アイスマン」らも熱い思いを胸に奮闘している。

平日の昼下がり、真っ白な氷の上で、浅田選手が黙々とジャンプやスピンを練習している。アリーナの出入り口には村上佳菜子選手（中京大）や小塚崇彦選手（トヨタ自動車）の姿も。三カ月後のソチ五輪を見すえ、どの表情も引き締まっている。

「整氷は、練習の合間の十五分ほどで済ませます」と施設運営会社ホーメックス（豊田市）の小原真さん(三三)。中京大から委託されリンクを整える五人のアイスマンの一人で、アリーナができた二〇〇七年から整氷を担ってきた。

午前八時から午後十一時まで、大小二つのリンクを一、二時間ごとに整える。中央部は整氷車と呼ばれる特殊な機械で表面をならすが、リンクの周辺部はエッジャーという小型機械を使った手作業だ。

大きいリンクは広さ約千八百平方㍍。全体の高低差が一㌢以内になるよう、レーダーで慎重に測りながら削っていく。「選手にけがをさせない環境をつくるのが使命。僕らは毎日が本番です」と小原さんは白い息を吐く。「氷がちょっと軟らかい」「パキパキした感じがする」。独特な感覚を大切にする選手らの声が届くたび、零下四度のリンクの上で試行錯誤を続けてきた。

選手の練習の合間にリンクを整氷する小原真さん＝愛知県豊田市の中京大アイスアリーナで

後輩アイスマンの遠山直希さん(二六)は、アイスホッケーの経験者でフィギュアへの興味も強い。一流選手と毎日すれ違うが、他の先輩と同様、あいさつ以外は言葉を交わさない。「練習に集中してもらいたいですから」。選手らの試合は仕事の合間もネットでチェックし、結果が良ければ心の中で「おめでとう」とつぶやく。

中京大職員でアリーナの責任者を務める森下克人さん(五〇)は「会話はなくても、選手たちの感謝の気持ちは大きい。遠征から戻るたび、リンクの事務所にはアイスマン宛ての手土産が届く」と話す。

リンクでは、練習を終えた選手自身がジャンプでえぐれた穴にシャーペット状の氷を手で詰め、アイスマンを手助けするのが習慣だ。「浅田選手らトップ層も例外ではない」と森下さん。

選手と裏方が二人三脚で育てる五輪の夢。はるか八千㌔先のソチへ、足もとは盤石だ。

（杉藤貴浩）